

# 「多文化社会とコミュニケーション」愛知県立大学（2020年度）

## 第14回「多文化社会におけるテストのありかた」

あべ やすし [abeyasusi@gmail.com](mailto:abeyasusi@gmail.com)

<http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tabunka2020/>

### テストのための教育／学習？

わたしは中学、高校、大学、そして市民講座での教育経験がある（中学、高校は中高一貫校での3ヶ月のみ）。そのなかで、もっとも熱心な学習者は市民講座の受講生だった。受講生はほとんどすべて自分よりも年上の人たちだった。自分が学びたいから、受講料をはらって学びにきていたのだ。「自分の人生をより楽しいものにするために学ぶ」という姿勢をみると、おしえる側も、やりがいを感じられる。「うてば、ひびく」という感触がえられるからだ。

生涯学習ということばがある。おとなになっても、いつでも好きなようになにかを学ぶことができるように、社会としても支援するということであり、そのために、生涯学習センターが各地にある。ここで重要なのは、そのようなハコを用意するだけでなく、学びたいことを学ぶための、生活のゆとりが保障されているかどうかということだ。働きすぎたければ、休日は「体をやすめる」ことにしか使えない。未来の展望がなければ、学習意欲がもてない。

やりたいことがあり、それをやるだけのゆとりがあるということが、第一に必要である。

学校での教育は、システム化されており、その仕組みになじめる人と、なじめない人がいる。テストで高得点をとることや宿題をこなすことも、できる人にはできて、みんなにできることではない。そして、学ぶこと自体がたのしくないと感じられてしまい、なげやりになってしまう学習者がうみだされる。そこには学校文化があり、その学校文化のなかで、他者化されてしまう学習者がいる。

学びたいから、学ぶ。それをささえる環境があれば、のびのびと学習できる。テストのための学習という観念から解放されてみると、学んだことが身につく。

### テストの社会言語学—たとえば漢字テストについて

ことばには、バリエーションがある。文字にもバリエーションがある。たとえば漢字には異体字もあれば、書体のバリエーションがある。教科書体だけが漢字のかたちではない。さまざまなバリエーションがあり、社会のなかで併用されている。

一方で、学校や入学試験、入社試験などの場では漢字の書きとりテストが実施されている。言語能力や言語の知識もテストされる。テストするからには、そこには基準が設定される。正誤を判断するための線引きが必要になるからである。

ただ、問題なのは、テスト問題をつくり、採点をする側に、適切な知識が不足している場合もあるということだ。

『日本語をつかまえる！』という本で、飯間浩明（いいま・ひろあき）はつぎのようにのべている。

あなたが漢字を覚えるときは、教科書の字形（教科書体）を手本に書くのがいいでしょう。ただ、漢字には、正解となる字形がいくつもあります。文化庁から指針も出ているので、学校の先生には、いろいろな字形を知っておいてほしいのです（いいま2019:197）。

たとえば「令」と「令」は「同じ漢字」であり、「形のちがいは、いわばデザインのちがいにすぎず、二つを区別する必要はありません。どちらも昔から書かれてきた正しい漢字です」と説明している（196ページ）。

飯間が指摘している文化庁の指針とは、つぎのようなものである。

文化審議会国語分科会 2016 「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/jitai\\_jikei\\_shishin.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/jitai_jikei_shishin.pdf)

この文書の10ページで「漢字の字体・字形に関して、社会で起きている問題」がとりあげられている。ここで「国語に関する世論調査」の結果をしめしたうえで、つぎのようにのべている。

こうした、漢字の字体・字形に関する意識の相違や偏りは、不特定多数の人を対象とするような各種試験等における、漢字の書き取り問題の評価などに影響しているおそれがある（11ページ）。

あまりにも採点基準のきびしい漢字テストはツイッターなどでも、たびたび話題になる。こうした問題について、小中高の国語教員に採点方針をインタビューした映像作品が、長野県梓川（あずさがわ）高校放送部が2006年に制作した『漢字テストのふしぎ』である。第29回東京ビデオフェスティバル2007でグランプリを受賞した。

・東京ビデオフェスティバルアーカイブ [歴代大賞作品]

[https://www3.jvckenwood.com/tvf/archive/grandprize/tvfgrand\\_29a.html](https://www3.jvckenwood.com/tvf/archive/grandprize/tvfgrand_29a.html)（現在、視聴できない様子）

→放送部の顧問だった林直哉（はやし・なおや）のユーチューブチャンネルで視聴できる。

<https://www.youtube.com/watch?v=FvdlbH0qtu4>

この作品は、完成度が高く、言語研究者の間でも知られてきた。わたしの周囲の研究者も、授業でとりあげてきたようである。また、つぎのような文献で言及されている。

- ・『漢字を楽しむ』（あつじ2008）
- ・「漢字の筆順をめぐる一学校教育を批判する」（あべ2008）
- ・「映像評 長野県梓川高校放送部「漢字テストのふしぎ」（2007年）」（なかの2009）
- ・「映像評 「漢字テスト」がうきぼりにするイデオロギー」（ましこ2009）
- ・「漢字テストの採点方針と採点者の信念に関する考察」（おおぬき2015）

なお、京都市にある「漢検 漢字博物館・図書館」では、企画展『なやみ深き漢字学習－明治から戦前へー』を開催している（<https://www.kanjimuseum.kyoto/kikakutenji/detail/200407.html>）。「悩み深き漢字テスト」として、近代日本で漢字テストがどのように実施されていたのかを展示している。漢字テストは、古くて新しい問題であるといえる。

## テストのユニバーサルデザイン

漢字の書き取りをテストすることは、どうしても採点の面で問題が生じやすい。そこで、センター試験のように選択問題にしてしまうこともできるだろう。漢字を手書きすることよりも入力する場面のほうが増加している現在では、書き取り問題の必要性が問われるといえる。むしろ、書体や異体字の知識を問うような問題のほうが適切であるかもしれない。身体障害のある受験者が入試でパソコンを使用することが禁止されてしまうことがあるが、その背景のひとつには漢字テストでの不正を問題視するということがあるようだ（『日経クロステック』「インタビュー 入試でのPC利用を認めて欲しい、障害者への“合理的配慮”が当たり前の社会へ」 <https://xtech.nikkei.com/it/article/Interview/20120213/381585/>）。

藤芳衛（ふじよし・まもる）は「大学入試センター試験とユニバーサルデザイン」というコラムで、センター試験の現状と改善にむけたとりくみをつぎのように説明している。

…中途失明者、重度の弱視者及び特に重度の読字困難者の受験を可能にするため、2次元ドットコードを活用した2種類の音声問題を開発している。センター試験には、点字問題と拡大文字問題しか用意されていない（ふじよし2017:5）。

大学入試センターは、「受験上の配慮案内」をウェブで公開し、どのような障害のある受験者がどのような配慮をうけられるか説明している（[http://www.dnc.ac.jp/sp/center/shiken\\_jouhou/hairyoy.html](http://www.dnc.ac.jp/sp/center/shiken_jouhou/hairyoy.html)）。

たとえば、発達障害のある受験者は、

- ・試験時間の延長（1.3倍）
- ・チェック解答
- ・拡大文字問題冊子の配布
- ・注意事項等の文書による伝達

- ・別室の設定
- ・試験室入口までの付添者の同伴

を希望することができる。ただし、申請が必要であり、医師の診断書や高校でじっさいにそのような対応をうけているかどうかを説明することが要求されている。

ここでのポイントは、読字障害（ディスレクシア）の人も自分で文章を読むことが要求されていることである。センター試験は文章を筆記する必要はないが、文章を自分で読むことが前提になっている。藤芳が指摘しているように、テスト問題を音声化するという対応はしていないのである。多様な人が受験する試験で、どのようにユニバーサルデザインを実現するのか。ひきつづき検討していく必要がある。

## 入試とカリキュラムの再検討

では、ニューカマーの受験者にとって、どのような課題があるだろうか。児島明（こじま・あきら）は『ニューカマーの子どもと学校文化』で高校進学を希望する外国籍者すべてが入学できるようにするためには、既存の受験体制とカリキュラムの見直しが必要だと主張している。

具体的に言えば、各都道府県下の高校における受け入れ校の指定、特別枠・特別選抜による受け入れ、学力試験における特別配慮（ルビを付す、時間を延長、別室試験、辞書持ちこみ、キーワードによる解説、など）、入学後の特別指導等の実施を早急に検討しなければならない。それと同時に、既存のカリキュラムの見直しも必要であろう。知へのアクセスをできるだけ容易にするために、漢字・漢語の使用を最小限にとどめるということが考えられるべきであろうし、学習内容をより普遍的に意味あるものへと精選する必要があるだろう（こじま 2006:213）。

「特別配慮」ということになると、それを否定的にとらえる層がでてくるだろう。そこで生じる摩擦に対して、ていねいに説明していくこと、日本の学校文化という全体をといなおすなかでニューカマーの子どもの学習という一部について議論していくことが重要である。また、受験やテストのありかたについても、再検討していく必要があるだろう。ニューカマーの大学進学についても、現状と課題を把握し、状況を改善する必要があるだろう。

## ともに学ぶということ

教育機関が競争と排除の論理でなりたっていれば、均質化された空間になじまない学習者は他者化され、参加することができなくなってしまう。ともに学ぶ、ともに生きるということに価値をおく社会にならなければ、テストのありかたも、学習のありかたも従来どおりのかたちが継続される。

とはいえ、障害者差別解消法以後の現在では、障害のある学習者を排除しないという価値観は、制度化されたものであり、否定できないものとなっている。そういった価値観を「多様な文化」に適應するのか、しないのかということが問われている。

性別二元論、異性愛中心主義を「多数派の価値観」であることをみとめ、それがすべての人にあてはまるものではないことを認知するなら、学校の設計や学習内容も、かえていく必要がある。

高齢世代を見れば、在日朝鮮人や被差別部落出身者、身体障害者のなかには、文字を（ほとんど）よみかきできない人がいる。それはこれまでの教育や社会、文化のありかたが、「すべての人」を包摂するものではなかったからである。「学ぶこと」、その権利がすべての人に保障されていなかったからである。そこで、だれでもいつでも学ぶことができる環境を整備する（学習権の保障）と同時に、文字がよみかきできなくても社会生活に困難が生じない仕組み（ユニバーサルデザイン）をつくっていく必要がある（あべ2005、2014、かどや／あべ編2010）。ともに学べなかった人のこの存在をふまえて社会をつくることもとめられる。

これまでの歴史と現状をふまえて、教育という営みや学校という空間をといなおしていく必要がある。多文化社会について考えることは、この社会の過去をふりかえるための、現在をみつめなおすための、未来を構想するための着眼点になりうる。それを考えるのは、この社会で生活しているすべての人である。多文化社会ということを考えるのは、そのようなことであると、わたしは考える。そこに意義があると思えるか、それがおもしろいと感じるか、自分と関係がある

と感じられるかどうかということは、あなた次第である。なにかを感じるなら、この授業にも意味があったのだらうし、なにも感じられなかったとすれば、わたしの敗北である。教員にできることは、刺激をなげかけ、情報を提供し、アンテナをきたえるためのノウハウをつたえることである。

毎回の授業内容で大事なポイントは、学生ひとりひとりが見いだすものである。見いだせないときは、教員が失敗した、あるいは、あなたには「あわなかった」ということである。自分にひびくものを見だし、それについて、自分で追求すること。そのためのきっかけづくりを教員はしている。教育をしているのではなくて、学習支援をしているのだ。

次回（第15回、8月21日）は、まとめにかえて、新型コロナウイルス流行以後の社会、遠隔授業のありかたをとりあげる。くわえて、期末テスト（8月22日）について解説する。

## 参考文献

愛本みずほ（あいもと・みずほ） 2017～2019 『ぼくの素晴らしい人生』 講談社（全5巻）

阿辻哲次（あつじ・てつじ） 2008 『漢字を楽しむ』 講談社現代新書

あべ やすし 2005 「識字と人権」 『人権と社会』（岡山人権問題研究所）1号、31-44

あべ・やすし 2008 「漢字の筆順をめぐる一学校教育を批判する」

<http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/hituzyun.html>

あべ やすし 2014 「情報のユニバーサルデザイン」 佐々木倫子（ささき・みちこ）編 『マイノリティの社会参加—障害者と多様なリテラシー』 くるしお出版、156-179

飯間浩明（いいま・ひろあき） 2019 『日本語をつかまえる！』 毎日新聞出版

伊藤史織（いとう・しおり） 2017 『異才、発見！ 枠を飛び出す子どもたち』 岩波新書

岩瀬直樹（いわせ・なおき）／寺中祥吾（てらなか・しょうご） 2014 『せんせいのつくり方—これでいいのかな？と考えるはじめた“わたし”へ』 旬報社

内田良（うちだ・りょう） 2015 『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』 光文社新書

大貫眞弘（おおぬき・まさひろ） 2015 「漢字テストの採点方針と採点者の信念に関する考察」 『東海大学課程資格教育センター論集』13号、77-84

かどや ひでのり／あべ やすし編 2010 『識字の社会言語学』 生活書院

河野俊寛（こうの・としひろ） 2012 『読み書き障害のある子どもへのサポートQ&A』 読書工房

近藤武夫（こんどう・たけお）編 2016 『学校でのICT利用による読み書き支援—合理的配慮のための具体的な実践』 金子書房

児島明（こじま・あきら） 2006 『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』 勁草書房

佐久間孝正（さくま・こうせい） 2015 『多国籍化する日本の学校』 勁草書房

志水宏吉（しみず・こうきち）／清水睦美（しみず・むつみ）編 2001 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』 明石書店

すぎむら なおみ／「しーとん」編 2010 『発達障害チェックシート できました—がっこうの まいにちを ゆらす・ずらす・つくる』 生活書院

なかの・まき 2009 「映像評 長野県梓川高校放送部「漢字テストのふしぎ」（2007年）」 『社会言語学』9号、271-282

中邑賢龍（なかむら・けんりゅう） 2007 『発達障害の子どもの「ユニークさ」を伸ばすテクノロジー』 中央法規出版

藤芳衛（ふじよし・まもる） 2017 「大学入試センター試験とユニバーサルデザイン」 『ノーマライゼーション』6月号、5ページ

堀尾輝久（ほりお・てるひさ）ほか編 1996 『学校文化という磁場』 柏書房

ましこ・ひでのり 2009 「映像評「漢字テスト」がうきぼりにするイデオロギー」 『社会言語学』9号、283-297

松尾知明（まつお・ともあき） 2013 「日本における多文化教育の構築—教育のユニバーサルデザインに向けて」 松尾編 『多文化教育をデザインする—移民時代のモデル構築』 勁草書房、3-24

源邦彦（みなもと・くにひこ） 2019 「黒人言語学史にみる人種主義の変遷—リベラリズム・ディスコース」 『言語社会』13、266-279

保井隆之（やすい・たかゆき） 2009 『みんなが主人公の学校』 大日本図書

柳治男（やなぎ・はるお） 2005 『〈学級〉の歴史学—自明視された空間を問う』 講談社

## ポイント解説：

多文化教育の空間としての夜間中学：佐久間孝正（さくま・こうせい）は『多国籍化する日本の学校』において、「義務教育に相当する教育機関で学級の多文化、多民族化をもっとも端的に示すのは、夜間中学である」と指摘している（さくま2015:137）。生涯学習という視点からいえば、学習の場は社会のなかにたくさんある。識字教室、日本語教室などのように、ボランティア中心で自主的に運営されているものもある。外国人学校、民族学校もある。学びの場の多様性そのものが多文化社会をうつしだす鏡であるといえる。

教育機会保障法：公立の夜間中学は全国各地にあるわけではなかった。自主夜間中学といって有志のボランティアによって運営されてきた夜間中学もあった。教育機会保障法が2016年に制定、施行されたことにより、公立夜間中学の設置がすすむことが期待されている。基礎教育保障学会のウェブサイトが参考になる（<https://jasbel.org>）。

教育におけるパターナリズム：教育は、子育てとおなじで、「このようにすれば正解」というものがない。なにをどのように教えるのか。どこまでは「教える」ほうがいいのか、どこからは「自分で考える」ようにしたほうがいいのか。正解はない。内田良（うちだ・りょう）は、「教育という「善きもの」は善きがゆえに歯止めがかからず、暴走していく。「感動」や「子どものため」という眩い（まばゆい）教育目標は、そこに潜む多大なリスクを見えなくさせる」と指摘している（うちだ2015:4）。「あなたのため」といいながら、自分の願望を投影しているだけではないか。ときには、そのように自問する必要もある。

「先生」になったら：日本では学校現場の「先生」にじゅうぶんな時間の余裕がない。たとえば部活動の顧問は「先生」のボランティアである。そのような状況のなかで、「いい先生」であることを期待される。いい先生でありたいと願うこともあるだろう。そんなとき、自分たちがおかれている状況を客観的にふりかえることができれば、問題のありかが見えてくる。なにかうまくいかないのは自分だけのせいではないことに気づくことができる。ここでは『〈学級〉の歴史学』（やなぎ2005）、『せんせいのつくり方―これでもいいのかな？と考えるはじめたわたしへ』（いわせ／てらなか2014）を紹介しておく。

正解主義の問題：小中高の教育では、「ひとつの正解」を設定し、正解か不正解かを判定することが多い。そのため、複数のバリエーションがあるものについて「どちらが正解なのか」と疑問をもってしまう場合がある。しかし、社会のなかには、「正解」がなく、自分で判断するしかないこともたくさんある。ものごとを相対的にとらえるということは、正解がひとつではないことを認識するということである。

研究と独自性：大学では、独自性に価値がおかれる。たとえば研究論文は、これまで論じられてこなかったことについて、独自の視点から追求することが期待されている。研究の独自性は、その人の名誉にかかわる。独自性に価値が置かれているからこそ、自他の文章をはっきり区別し、引用は引用と明記し、出典を明示するわけである。研究者にとって、剽窃（ひょうせつ）などという研究不正は、ありえないことなのである。自分の文章にこそ価値があるからである。研究者の本分は、文章を書くことである。映像資料をつくることではない。

## コメントの紹介

正直に言うと、これまでの授業資料にあった主張は同意できないものが多かったのですが、今回は全面的に同意できました。僕自身、コミュニケーション能力が自分の中に宿っているものなのかわからなくなる瞬間が何度もあります。相手が、自分が伸び伸びと話せるような性質の人か、その環境が話しやすいものであるかなどの要因によって自分のコミュニケーション能力が上下してしまう感覚をいつも覚えます。…

【あべのコメント：わたしは多くの人にとっては初耳であり意識していないこと、けれどもこの社会のなかで他者化され、不可視化されている人にとっては「あるある」「ほんとはそれ」という内容を意図してとりあげています。一部の人には「抑圧からの解放」になるような内容が、多数派にとっては不快に感じられてしまうこともあります。それでも、とりあげる必要のあることは、とりあげる。「コミュニケーション能力」などというお題目も、そのひとつです。】

まず、「お膳立てをして強制的に話し合うことにどのような学習効果があるのか？（後略）」という問いは効果がないことを前提としており、学生に意味のないものだという意識を植え付けているように思える。上記のように問われると意味のないのだと熟考せずに答えてしまう学生がいる。しかしながら、私は教育現場における「グループワーク」は効果があると思う。かつて、また今日においても、日本では政治的な意見などを始めとして様々な問題における意見を日常で口にすることがはばかれることがある。特に性別や年齢が原因で制限されることがある。これは今まで教育現場で受動的な授業・講義が多く行われ「グループワーク」が行われてこなかった代償ではないか。だから日常的に議論は行われない。今日、「グループワーク」を教育現場に取り入れることで性別・年齢関係なく話しあう場をまず強制的に作り出すという点で効果があると思う。…

【あべのコメント：グループワークについては、あんなふうにこちらが問いかけても、ほんとうに多様な意見ができて、おもしろいです。なにが正解ということではなく、それぞれの学生が体験してきたこと、感じていることがあるのが確認できます。そんなに「植え付け」られるものでもないと思いますし、そういうものだと思います。大人ですから。】

…これまで授業を受け、学生みんなのコメントやそれに対してのあべ先生のコメントを読んできて、授業でのあべ先生の考え方に対して、「ここはちょっと違う気がする」というようなコメントがあまりないように感じた。人それぞれ考え方は違って、反対の意見もありそうなのに、と思っていた。文字だと意見を言いづらいということもあるのだろうかと思った。

【あべのコメント：紹介していないだけです。話がズレているからという理由の場合もあるし、他者を攻撃するような内容であるからという場合もあります。わたしの説明に「ちょっと違う」というのは自由なんですけど、差別を助長するためにコメントを紹介するのではないので。教員に対する中傷コメントも、近年は問題になってきていて、かなりしんどい思いをしている教員もいるようです。わたしは男性なので、攻撃されにくいようです。】

先日、授業で発表の練習をする際、日本の英語教育の問題点とそこから見える英語のあるべき学び方について取り上げた。そこでコミュニケーション能力についても言及した。今の日本の英語教育では「英語を話す」ことが目的となっており、そのために単語・文法などが行われ、コミュニケーションから離れてしまっている。また、日本の英語教育改革の原動力となっているのは「英語が話すことができないのは学校教育のせいだ」という世間的な批判であるが、このことから日本では「言語学習が学校で終わるもの」という考えが根付いてしまっていることがわかる。日本は「言語学習は生涯学習である」という考え方が欠けている。その考え方から、言語（英語）を生涯学ぶには学習者の自律性が必要になる。なので自律性を生むには、英語で話す「内容」を重視することが大切であるとわかる。さらに、内容を重視することで「何を話そうか」「こういったことはどうか」と自然とコミュニケーションの練習を生み出すことができる。今、オンライン授業でグループワークやペアワークが多く行われる。しかし、あまりにも雑すぎるように感じる。ただ単にグループワークをすればコミュニケーションの練習ができると思っているのかもしれない。授業を受ける側からすると、話すテーマが話しづらいことが多く、結局はあまり意味がないように感じる。これからは、より「内容」を重視し、議論しやすいテーマにすれば、コミュニケーション能力の養成がより良く進むだろう。

…日本の教育法を考えてみると、日本の子供たちのコミュニケーション能力を下げているのは大人たちではないかと思う。例えば小・中学校の授業の時、大体のものが先生の話を書きただけノートに写すという単純作業のみを生徒は行っている。また、授業中に話したりした生徒に対して先生は叱る。それはマナーをつけるという意味では先生の行動は正しいものではあるが、時にトラウマになるようなことを言ったり、授業中どんなことであっても話してはならないという印象を作ったりして、そこででのコミュニケーションがなくなってしまう。それに対して高校に上がると、ペアワークやグループディスカッションの授業が急に増える。私の考えでは人のコミュニケーション能力は環境や個人の経験にもよるが、小学生から中学生の時にほとんど形成されるので、今更高校に上がって意見を言おうなど言っても難しいことだと思う。私はアメリカの高校に通っていたこともあり、文化の違いもあると思うが、やはり授業に対する姿勢、人とのコミュニケーションをする時間というのは全然違うと感じた。日本はやはりアメリカと比べると、意見を言わなかったり、相手の意見に同調したりする。その明らかな違いはやはり、幼児期における学校での教育法ではないかと思う。…

…「コミュ力」の定義について検索をかけてみると「日本コミュニケーション能力検定協会」という団体のサイトを見つけた(<https://www.ca-japan.org/>)。サイト内では「コミュニケーション能力により人生の質が左右される」「コミュニケーション能力の差で年収が大きく変わる」といったことが強調されている。そして何より資格として取得するものになっているというのがコミュニケーション能力の個人化を象徴していると感じる。…

-----

社会が求めるコミュニケーション能力というのは、文脈依存度の高いコミュニケーションという尺度において、可能な限り環境に依存せず高いパフォーマンスを発揮できる能力のことだと思うので、それを全ての人間に求めることの是非はともかくとして、「コミュニケーション能力は環境に左右されるので、誰が、誰と、どの状況で、という文脈を離れたコミュニケーションは評価することはできない」というのはあまりよくわかりませんし(逆に環境に依存しない能力というのがどれほどあるのか?というのも気になりました)。人の行為や性質はどうあっても環境に依存してしまう以上、他人はその人を環境に依存したその行為・性質からしか判断できないので、どの環境でも行為・性質を可能な限り発揮できる人材を求められるというのは(コミュニケーションが苦手な私からすると厳しいですが)理にかなっていると感じていました。しかし、そう感じてしまうのは、講義でも指摘されている評価する側・される側という非対称な状況が出来上がり、しかも定着してしまっているからでしょうか。「キャッチボール」に喩えられることの多いコミュニケーションという行為ですが、社会において片方(特にされる側)の比重が重くなってしまっているように感じるので、その評価なるものをするのであれば、それを行う各個人ではなく、「キャッチボール」そのものに対しての評価がなされるような社会であればもう少し生きやすく感じるかもしれません。

【あべのコメント：「逆に環境に依存しない能力というのがどれほどあるのか？」とても大事な問いですね。】

-----

コミュニケーション能力については今、コミュカという言葉がよく使われているが何を根拠にしているのかということについて考えさせられた。私にとってはその時一緒にいる人によってだいぶ変わっているものだし、ずっと同じ「コミュカ」で過ごしていない。これは私だけではなくてほとんどの人がそうなのではないか。だから能力、とは言えないと思う。これがもし能力だとしたらかかるうえでの基準があるはずだけど恐らくないだろう。コミュニケーション能力が高い人は積極性があるというのも違うと思う。もしコミュニケーション能力に高い低いがあったとしても積極性があることが高さに結びつくわけではないと思うので授業で自分から発言することが良いことでそれによって成績が変わってくるような制度は間違っているのではないかと考えた。

【あべのコメント：「もし能力だとしたらかかるうえでの基準があるはず」というのは、つきつめてみる価値のあるポイントです。測定なんてできないはずのものを勝手に基準でテストして数値化してしまっているのではないか、ということが今回(第14回)のテーマです。なにごとも、基準や視点をかえれば、結果もちがってくるものでしょう。そのようにとらえることが「ものごとを相対的にとらえる」ということであり、この授業で練習していることなのです。】

-----

授業において積極性だけでなく聞き上手である事も高評価に繋がるような授業づくりをしていくことが大事であるということには共感できるが、社会で必要とされている「聞き上手」であることと、グループワークで積極的になれないことは全く別だと感じた。会話や会議において意見を聞く側に回り、それを分かりやすくまとめて会議を円滑に動かせるのが聞き上手であると認識しているが、おそらくここで議論されている積極的になれない人とは、ただ単に発言ができない人のことだろう。もちろんそのような人達が発言しやすいような環境を作ることは大事なのだが、話しづらい場面でも発言する経験や気概は持っておくべきだと感じる。また、そのようなコミュニケーション能力がなくても自分の力を発揮できる場所はたくさんある。だから、そのような場面で発言をするのが自分には向いていないと実感する機会としても、現在の授業形態は悪くないのかもしれないと考える。

-----

「適応・不適応を個人の問題として、能力の差のようにとらえてしまえば、たまたまその場にいた人だけを評価することになってしまう。」という部分に関してまさに私が小学校・中学校で受けてきた授業がそれにあたると思いました。小学校・中学校では授業中に手を挙げた回数や積極的に発言している人にポイントが加算されるような授業が多くて積極的に発言をすることが苦手だった自分にはとても嫌な思い出として覚えています。自分より学力が劣っている人でも先生と仲が良かったり、授業中に自分が思ったことが言えて積極性が認められれば内申点が高いということが実際にありました。本来なら発言したいときに生徒が発言するのを待つ、発言しやすい環境を作ることが教育の目的であるのに、発言することが成績をつけるための手段になっていました。積極的な人がいいとされるのは目立つからであって、先生からしてもポイント制にしたほうが成績を付けることが簡単だからだと思います。残念ながら私は小学校・中学校でそれ以外の成績の付け方をする先生に出会えなかったので正直どの先生に対しても心を開けたことはありません。その成績の付け方を何度の経験したおかげで、積極性がある子よりテストでいい点数を取って見返してやろう、その判断基準は全員に適応できるものではないということを見せつけようと勉強に励むことが出来たので今ではその先生方に感謝の気持ちもあります。が、あの時の嫌だった授業を思い出すと少し複雑な気持ちです…。

-----

「聞き上手」の話のところがよくわからなかった。積極的ではないものの例として挙げていた「聞き上手」というのはどのような人のことですか？そして「引きの態度」とはどういう意味ですか？自分は「聞き上手」と言えば、時には適度な相槌をうち、時には相手の話の本質を引き出す質問をするなどの「積極的」な姿勢で相手の話を聞きに行く人のことを想像していました。相手の話を上手に聞こうという目的のもと聞き手に徹せられたのならそれはもう「積極的」だし、逆に、相手の話を意図的に上手に聞こうと欲していない人に他者が「君は聞き上手だね」というのは、勝手なレッテル貼りだとも思う。他者と比較するのではなく、自分なりの積極性を追求していけるような環境を与える教育の重要性にはすごく共感できた。自分が勇気を振り絞った発表で「積極性が足りない」なんて子供の頃に言われたら、積極的になろうと思う以前に、自分には積極性がないんだとずっと思い込んでしまいそう。さらに現代では、コミュニケーション能力という言葉が浸透したことによって、「俺（あいつ）ってコミュ障だわ（コミュニケーション障害の略ご）」のようなポップな言葉で自分自身や他者の可能性を縛ってしまうことがある。

-----

今回の授業の、コミュニケーション能力は相手や場が変わることで変化するものであり、相互に協力し合うことで成立させるものだという考え方を読み、1年生の時に受けた社会福祉入門でヴォルフ・ヴォルフフェンスベルガーの「ノーマル概念は統計的なものであり、『逸脱』は私たちが作るのだ」という言葉が紹介されたことを思い出した。「コミュニケーション障害」は、特にこの言葉に当てはまる、医師から診断された明確な病気があるわけではないにもかかわらず、自らコミュニケーションができる人できない人という概念を生み出し、「逸脱」としてレッテルを張ったものだと思う。「逸脱」を作り出しているのが、私たちという社会であるなら、社会の側が変容し、「コミュ障」と呼ばれるような人が生まれてしまう状態を変える努力をしていくべきなのだと感じた。

-----

私もコミュニケーションについてずいぶん悩まされた。今回の資料にも掲載されていたように、私も「コミュ障」であると自分で周囲に言って回っていた。資料の中には「コミュニケーションといものは能力の共同性によって成り立つ」と書かれていて、なるほどと思わされた。私はコミュニケーションがあまりうまく取れないことを恥ずかしく思い、最初から「私はコミュニケーションをとることが苦手ですよ」ということによって自分にハンデを与えてもらうように仕向けていたのだ。それは、「私はコミュニケーションをとることが苦手だから、気を遣ってください、サポートしてください、許してください」と言っているのと同様であった。また、コミュニケーションの一切を相手にゆだねているように見えるが、実際は相手に押し付けているだけだったのだ。「コミュ障」は病気でもなく、障害でもないのだ。ただ、コミュニケーションが苦手ですそれを克服することから逃げていただけなのだ。それでは私の「コミュ障」は治ることはない。まず私が取るべき行動は相手の気持ちに寄り添いながら話することだったのだ。会話の進行は相手にゆだねても、サポートといえることはしっかりと行うべきである。これからは少しずつだが相手との会話で自分のできることを増やしていこうと思った。…

-----

高校まで、あるいは大学までは、その『お膳立てをして強制的に話し合いをさせる』ことが重要なのだと私は考える。自分なりの意見を持つ、主張する、対立する、より良いものに昇華させる、という経験が大事だからだ。それは別に意図的に作られた対立の関係でも答えが決まったマッチポンプのようなお題でもいい。少しでも自分の思考を使い、そして他者と言葉を交わし「コミュニケーション能力」を伸ばすことこそが重要で、問いをたてたりすることは二の次だからだ。学校は訓練の場所なのだから将来必要とされる能力の足掛かりになればいいだろう。そして、学びの中で問いやお題を見出したときにこの能力が発揮されればいい。グループディスカッションは教育的に成功しているかは分からないが、全く無意味ではないと考える。問いを見つけられる能力を養うということや意見のオリジナリティ性を持つことなどが課題としては残る。ただ、それを授業で身につけさせることは困難だと感じる。個人のユニークな能力を伸ばすために普遍的な授業を行うのは本末転倒だ。それは個人が経験したことから、少しずつ築いていくものなのではないだろうか。いずれにしろ、生徒に考えるきっかけを与え、そしてコミュニケーション能力と呼ばれているものを養うためにはグループワークは有用だと考える。

-----

私は今回の授業を通して、学校教育の評価のあり方を考えました。日本では、特に小学校で「授業に対する積極性」や「学校生活でのクラスの仲間との交流」などが通知表で評価されていると思います。実際に、私が通っていた小学校ではそのような項目で◎から×で評価されていました。レジュメにもあったように、私はこのように個々人の積極性やコミュニケーション能力を評価するのはいかがなものかとずっと思っていました。授業中の発言が少なかったり休み時間一人でいることが多いことから、通知表で「授業への意欲△」と評価されることで、自分は積極的な性格ではないのだと感じてしまうのではないのでしょうか。人から評価されてしまう（決めつけられる）ことで、自分はそのような人間なのだと感じその後も引きずってしまうのではないかと考えました。さらには、人と会話するときに「私コミュ障だから」と自分の首を絞め続けてしまうのだと思います。以上から、教育現場で生徒を個人化し評価するべきではないと考えました。…



-----

今回の資料を読んで、小中学校の授業を思い出しました。いつも全員挙手をしないとイケなくて、していない子にはクラスメイトや先生から圧がかかり、その子が挙げるまで先生は誰も当てませんでした。全員挙手が授業評価の項目のひとつで、どのクラスが授業評価5をいちばん取れるか競っていたので当時はしょうがないことだと思っていましたが、今考えると人前で話すことが苦手な子にとってはストレスでしかなかっただろうと考えます。みんなのまえで話すことが苦手な子でも、慣れている子の前でなら自分の意見をはっきり言える子もいたので、「積極性」が欠けているわけではなくただ単に苦手なのだと思います。人前で話すことに慣れることも必要だとは思いますが、そうであればきちんと「話す場所」を提供すべきで、挙手をしない子を「悪い」として追い詰めて挙手させて発言させることはその子にとってなんの成長にもなりません。全員挙手のような上っ面の「積極性」を求める授業ではなく、話しやすい環境が作られた授業を学校は提供すべきだと思います。

-----

私は人見知りで今はだいぶましになりましたが、大学生になるまでは心の許せる友達以外の人と話すのが本当に苦手でした。二人なら自分から発言できるのですが、グループワークといった三人以上の集団になると自分から発言できませんでした。そのためグループワークの時間が苦痛でした。また、グループで議論をする際、自分の意見を発する人が少なく、特定の人意見だけが採用されてしまうことがありました。グループワークが、自分の意見を発したり他人の意見に賛同や反対をして理解を深めることを目的としているならば、グループワークでそれが十分に達成できるとは思えません。しかし、グループ内で他人と関わる上で協調性は磨かれていくと考えます。グループワークは効果がまったくないわけではないが、みんなが意見を発せる環境や空気感を作れるように工夫した方が良いと私は考えます。

【あべのコメント：なにごととも経験ですからね。回数をかさねていくことで、なれてくる面もある。】

-----

コミュニケーション障害、通称コミュ障。私たち学生の中では頻繁に出てくる言葉である。「私コミュ障だからー」というような感じで、本当にコミュ障か？みたいな人でも自ら自称してくるのだ。このような自称コミュ障の人たちは実際はそこまでコミュ障ではない。ただし、それは自分の近いコミュニティ内の話だ。それよりっ外のコミュニティは信用のおける相手ではないため警戒してあまり口を開かなくなる。故に、自称コミュ障という行為は自分自身のテリトリーを守るための行為であると私は推測する。そして自称コミュ障が広がった原因としてインターネットの普及を挙げる。不特定多数とつながることによる個人情報流出の危険や相手の顔を見ないで行うコミュニケーションの不安が、現代の若者たちに警戒心を持たせ、自己防衛の一つとしてコミュ障を自称する人が増えたのではないだろうか。

…コミュ障という言葉は2010年に就活の前後に「コミュニケーション能力が重要視される」という文言から派生されたとされている。参考：<https://blog.gururimichi.com/entry/2014/10/18/001006>

-----

コミュニケーション障害とはなんなのでしょう？おそらくそれは、その語を使っている人からすれば、情報の伝達がうまくできなかつたり、人と話すときになかなか言葉を出せない人のことを指しているのだと思います。しかし、障害ということばは簡単に使っていていいことばではないはず。本当に苦しんでいる人たちに対して失礼だと考え、また「話すことが苦手」であったり、「人見知り」ということばで表すだけでいいと思います。本来は互いの気持ちを理解するという意義のコミュニケーションが、むしろ人を傷つけ、悪い方向に向かっているのは悪いことです。

また、私は教職の生徒指導論の講義を取っているのですが、教育に関して、やはりコミュニケーションに重きを置きすぎていると感じます。教育の本来の目的は人格の形成であり、子どもを理解することが1番の教師の務めだと教わりました。教育を受ける子どもは、自分の意見を自由な形で持つ権利があり、それを強制されるいわれはないはず。口には出さなくても考えを巡らせている子もいるし、学校での評価は積極性だけではなく、総合的に個人を見るべきだと思います。また、他者への期待と支配欲に関して、それが行き過ぎた結果の1つに、デートDVがあると考えました。相手が自分のことを好きだと期待しすぎて、思い通りにならないかどうかの不安のために暴力、暴言を浴びせます。そんなことは決してあってはいけません。人間の衝突の多くは他者とのコミュニケーションや理解が上手くいかないことにより起こるものだと考えるため、自分と他者は違っていて、それぞれに考え方や感じ方があるということを念頭において関わるべきだと思います。

-----

…コミュニケーションについての問題ですが、「コミュ障」とは真逆で人と話すのが大好きで逆に異性の人と話す「チャライ」という問題もあります。自分も友達からそう言われたことがありました。だから、実際はそもそもその人の価値観によってコミュニケーション能力の意味が変わってくるのです。

小学生の頃、僕には女友達ばかりいました。男子よりも女子と仲良くしたほうが自分の気が楽で、変に気負うことなく自分の色が出せたのです。僕はこの事実に対して無頓着であったし、女友達も分け隔てなく接してくれたので問題があったわけではありませんでした。しかし、母はこの実態を非常に重くとらえました。男の子と遊んで仲良くなるまで家に入れないと言われたことがありました。歯向かうこともできずに僕は頑張って男子に声をかけ、その子の家に遊びに行きましたが、その子たちがするゲームを楽しめず、歩調を合わせるのもしんどかったです。なぜ小学生の頃、女友達が多かったのか、今でも明確な理由があるわけではありません。ただ、一つ、僕の性格がそれにあっていたからというのが一番当てはまる気がします。カードゲームするよりお気に入りのシール集めがしたかった、かっこいいものよりかわいいものが好きだった、だから女子と仲良くなるほかなかったのです。男子はカードゲーム、かっこいいものを好むのが多数派だったので、彼らと遊んでも居心地が悪かったのです。中学生に上がると、部活動に所属することになり、男子だけの集団に身を置かざるを得なくなりました。すると、慣れというものもあるかもしれませんが、男子と話すときに緊張したり、何か苦しむこともなくなりました。クラスでは女子と話すことのほうが多かったのですが、男子とも遊んだり、趣味を話したりもできるようになりました。配布資料3ページを読み、思ったのが、自分が落ち着ける場所を見つけるのが一番大切だということです。無理して周りに合わせて辛い思いをするくらいなら、たとえ周りからしたら変だとしても、自分に適したコミュニケーションの仕方を貫いたほうがいい。この小学生の時の話をある人にしたら、「自分とは違うから理解できないや。そんな人を見たこともない。」と言われました。まあこれが普通なんだと思います。でもこれをもってコミュ障だと言うのは違うと思います。人それぞれ心地よい人付き合いの仕方があることを忘れないようにすべきだと思います。

・ラーニング・コモنزの空間が大学図書館にあるのは羨ましいし、名大図書館は高校生と大学入学後に実際行ったことがあるが、県大図書館との環境の差に「これが国立大学の力か」なんて思った記憶もある。ただ、どちらの図書館にも共通するのは閉鎖的であるということであると思う。特に県大図書館は入館証（学生証）がない人は直接カウンターにさえたどり着けない。学内の人向けに整備される（もちろん学費の内訳に整備費が入っているだろう）ということはあるが、共同学習の場としては微妙だと思う。図書相互貸出など、サービス自体が利用できないわけではないが、例えば私が名大生と名大図書館で調査するときに申請書を毎回記入する手順は学外者を含めた共同学習を妨げている。お金や自治の問題があるのかもしれないが、いまだに大学図書館の位置付けが感覚的に理解できないのは、学内向けの利用しやすさと学外向けの利用しづらさを感じているのも理由だと思った。

・積極性が学校で求められることについて、挙手した数を数えておく中学校の社会科教員がいたが、私は話したがりの性格なのでプラスに効いた。教員としては通知表の関心や意欲、態度の項目の評価の参考にしたいのだと思ったが、今回の授業で逆に損をする人（損得の問題ではないかもしれないが）もいるということを知って、そもそも積極的かどうかを判断したところで何にもならないと思った。興味があれば評価などされなくても勝手に学びを深めるし、興味がなければ挙手したところで評価のためというマイナスな意識しか生まれえないと思う。…

私も「新型コロナウイルス ラーニングコモنز」で検索してみると、やはり利用が制限されている施設が多くみられました。しかし、同志社大学では、対面でのサポートができない代わりにTeamsを利用しオンラインで、オンライン授業などの相談を受け付けていました。さらに、名古屋大学同様にラーニングコモنزの専用サイト(<https://ryoshinkan-ic.doshisha.ac.jp/>)があり、施設も最新機器が用意されていたり、コンセプトや状況に合わせた部屋やイベントが用意されていたりと、とても充実しています。さらに、特徴的だと思ったのが、それぞれの部屋の間にはほとんど仕切りがなく、オープンな空間になっているという点です。仕切りが無いことでより開放的な空間になり、より多くの出会いや意見の交換、情報共有が可能になると思い、とてもいい取り組みだと感じました。…

…大学では、私はグループワークの場がほとんどなく、一度だけ、ある一般教養の授業でグループワークを行いました。議題は、「イマドキの県大生」。それほど興味深い内容とは言えませんでした。議論の仕方に工夫があり、全員学部の違う初対面でも話が盛り上がりました。工夫として、ブレインストーミングとKJ法を用いたことが挙げられます。とにかくたくさんアイデアを各々で付箋に書き出し、後に様々な付箋をグループ化して議論を深めていく方法です。この方法を使うことによって、自分の意見が言いづらいという状況が解消され、コミュニケーションしやすい場が作られた一例と言えます。このことから、コミュニケーションしやすい場を作ることは、教員に概ね責任が向くように感じられる。そこで学生側も話を聴く側として、きちんと参加して、意見があれば伝える行為を疎かにしないようにしていきたいと思っています。

【あべのコメント：KJ法をつかうのはいいですね。でた意見はすべて一覽にされるわけで。ひとつの方向に場がながされていくということがなさそう。】

自分は教育発達学科ですが、対面授業の時からグループワーク、ペアワークはものすごく多くて、毎時間あったくらいだったと記憶しています。(他学科はどのくらいの頻度でしているのか気になります。)何か動画を見たあとには必ず周りとの交流、それが終わればグループごとに話し合った内容を発表。同じような意見を出し合って、時間の無駄だなと感じていました。遠隔授業になった今も、グループワークを組み込んでおけば講義の質が上がると思っているのか、とにかくグループワークをさせられている印象です。遠隔授業のグループワークは、授業資料で提示された話題について話し合い、そのまとめを提出したり、teamsでの授業の合間に一度中断してグループ通話をしたりという形が多いです。講義の内容にもよると思いますが、グループワークをしていて、1人では思いつかない深い学びが得られたと感じることは稀です。教育実践として成功しているかという問いに対しては、成功しているケースもあるが、失敗のケースの方が多いというように思います。

…グループワークの良さは何よりも、自分とは全く異なる意見に出会えることではないでしょうか。友達でももちろん違う意見を持っている子はいますが、やはり普段一緒にいる子は考え方が似ているような気がします。その点、授業中にするグループワークは席の近い子や、くじ引きなど普段は話さないような子と意見交換をすることができるので自分の考えを広げるいい機会になると思います。遠隔授業でのグループワークはその点では有効であると感じますが、オンラインなので音のズレや、顔が見えないこともあり少しやりにくさを感じています。…

今回の講義で取り上げられていた「コミュニケーション障害」略して「コミュ障」について思う事があります。それは大学のオンライン授業についてです。180人ほどのクラスの授業で質問がある人はマイクをオンにして言ってくださいといわれたのですが、会ったこともない人の前でしかもコンピューター上で質問するなんてとても出来ませんでした。私は普段初めて会う人とあまり緊張せずに話す事ができるタイプなので、コミュニケーションをとる事が難しいと感じる事があまりありませんでした。だから、オンライン授業になってこんなにも話す事が難しい事あるんだと驚きました。自分なりにどうやって話せるようになるかなと考えたのですがいい方法が見つからなくて困っています。

【あべのコメント：オンライン授業にかぎらないですね。社会心理学でいう「傍観者効果」「責任の分散」のようなものです。「だれかが発言するだろう」「わたしはしなくていいだろう」という心理。もちろん、勇気がだせないということもあるでしょう。対面授業でも、なんとなく発言をもとめても、手をあげる人は例外的です。なので、近づいていって回答をもとめる場合があります。シンポジウムのような場でも、質疑応答の際にどんどん手をあげる人、だまっている人の両方がいます。なかには空気を読まずに長時間自分語りをしてしまう人もいます。発言すればいいわけでもない。】

…遠隔授業において先生方の方針なのかどうかは定かではないがグループワークやペアワークの時間が授業内で比較的確保されているように感じる。それも従来の対面授業とさほど大差ない回数行われている。Zoomの場合であればブレイクアウトルームセッションに分けられ他の生徒と議論であったり相談であったりをする。私自身このシステムはとてありがたく感じておりその理由としては対面授業においては周りのグループやペアからの話していることや雑音が耳に入り気が散ることが多く、またわからない問いについても答えがたまたま耳に入ることがあるが、その一方でオンラインではパトカーのサイレンの音などが耳に入ることはあっても答えはいくら耳を澄まして聞こえないので自分自身で考えざるを得なくなり結果として理解が従来の倍ほどよくなるからである。…

…zoom上でペアワークやグループワークがありますが、一見相手の顔も見えるしちゃんとコミュニケーションがとれるので対面授業の時とさほど変わらないように感じますが、実際にやってみると違いを感じます。対面授業の時は一つの部屋に多くの人が入って周りがざわざわとした状態でグループワークを行っていますが、遠隔授業ではほとんどの人が自分の部屋から参加しているためそういった話しやすい環境がないからか、変な沈黙ができたり急に気まづくなったりします。あと、時差が生じるため発言が誰かとかぶってしまったり、聞こえなくなってしまうことも多々あります。やはり遠隔の方がコミュニケーションが取りづらいです。…

【あべのコメント：ひとつ上のコメントと対比するとおもしろいですね。「雑音がないからいい」と感じる場合もあれば、「変な沈黙」と感じる場合もある。なにごとも両面がある。人ごとに、とらえかたがある。】

…下校中のグループワーク的な意見交換は、親しい友達とのものだと思われるので話が弾むのは当然だと思う。グループワークの目的は、さまざまな考えを知ることと、普段話さない相手とコミュニケーションを取ることだと考える。授業内容が充実したものであれば、親しくないひととも闊達な議論が望めると思う。…

図書館が電子書籍の発達によって、利用価値が低下してしまったことと同じように、大学の施設そのものが、コロナウイルス拡大防止によるオンライン授業化によって利用価値が低下してしまったように感じます。オンライン授業に最初決まった時は、きちんと学ぶことができるのか戸惑いと不安がありましたが、実際半年オンライン授業を受けてみて、思いのほかきちんと学習できています。大学に行くための往復時間も節約できるため、時間もより有効に使えていると思っています。そうすると、大学の施設自体の必要性や利用価値が低下してしまいます。そこで、配布資料で述べられていた図書館と同じように、大学施設も人的資源をより強調し、重要視するべきだと思います。大学の施設で学習することのメリットは、学生同士や学生と教師の直接のコミュニケーションが取れるということだと思います。コロナウイルスが落ち着いてまた大学に通えるようになったときに大学というものが、オンライン授業じゃなくて大学に直接通えることができるようになって良かったなと思えるような価値ある存在であってほしいと思います。

【あべのコメント：リモートワークがうまくいっている企業もあるわけで、企業に就職しようと思っている学生にとっては、遠隔授業への対応というの、いい練習になっているのではないのでしょうか。わたしが企業の採用担当者ならパソコンの操作になれていない人は採用したくないと思うんですね。「タッチタイプの練習している」という声はあまり聞かないように思いますが、実際どうなのでしょう。コミュニケーション能力よりよっぽど大事のような気がします。】

…私が受けているある授業ではカメラオフのまま話し合います。遠隔授業が初めてということもあり、その授業の先生は数回授業を重ねた後に「遠隔授業でのグループワーク」に関するアンケートをとっていました。結果、「顔が見えない分コミュニケーションがとりにくい、顔を出した方がいい」という意見が過半数以上で、先生からは「できるだけ、最初だけでもカメラオンにしてみてもいいかも」といったようなお話がありました。なので、その話があって以降、私自身は顔出しはどちらでもいいと思っていたのですが、グループワークが始まって第一声を発する時に、「カメラオンにしますか？」とメンバーに問いかけるように心がけていたのですが、返ってくるのは「あ、このままで（オフ）大丈夫ですー。」といったものばかりで、2、3回でもう聞くのはやめました。たまたま顔を出したくない派の人ばかりに当たっていたのかもしれないし、顔を出さない方がリラックスできると考える人もいますが、確かにアンケートでは「顔が見えないから…」と言っていた人が多かったのに、いざどうするかと言われたらカメラオンにしようとは言わないのだなと思いました。さらに、「積極的であるべきだ？」という話にもありましたが、積極的なことだけがコミュニケーションにおいていいことだとは私も思いません。ですが、遠隔授業でグループワークをしているとたまに、ほとんど声を発しない人もいます。自分は沈黙が嫌で喋り続けてしまうタイプなのですが、カメラオフとなると、この人は喋ってないけど画面の向こう側で頷いてくれてるんだらうか、もしかして私が喋りすぎて口も挟めないって困ってるんだらうか、などと考えてしまうし、結局顔が見えない上に声も聞こえないとなると何人グループだったか？などと悲しく感じてしまいます。この場合においては、どんなに真剣に相手の話を聞いて頷いていたとしても伝わらない「聞き上手」な人が損をしている気がしてならないです。以上のことを踏まえると、個人的には遠隔授業でのグループワークはカメラオンにしてやった方が楽しいだろうと思うし、先生側もいろんな意見を持つ生徒がいるので大変かもしれませんが「グループワークはカメラオン（オフ）で進めましょう」などと断定してくれた方がいいなと思ってしまいました。

授業のグループワークについて、私はしっかり意見交換ができていく気がしていません。協力して一つの答えを見つけ出すという形ではなく、誰かの見つけた答えを自分たちのものにするという印象があります。仲良い人が相手だとお互い楽しもうとする考えがあると思います。それでいっか、という形で結論を出してしまいます。あまり仲の良くない人が相手だと、緊張したり、否定されるのを恐れたりして、自分の意見が言いづらくなるのではないのでしょうか。このように、私は、あまり意味のあるグループワークをできている気がしません。そもそも、グループワークに参加できないこともありました。一人で受けている授業で、「近くの人と話し合ってください」と言われても、周りは友達同士で話をしていて、私は相手がおらず、誰とも話さずに終わることがあります。周りが話し合いをしているのに、自分は誰とも話していないというのは、とても嫌な気持ちになります。（企業が求めるコミュニケーション能力や積極性というのは、このような場面で話に入っていき力なのでしょう。）このように、グループワークがあるから、一人では授業を受けづらい、受けたくない、と思う授業もありました。もちろん、友達同士が固まらないように、席順を指定してくれる先生もいて、その時は、安心してグループワークに参加することができました。…

…強制的に話し合いをする場合でも他人と意見交換はできる。他人の考え方を垣間見ることができるというのは学習効果があるとは言えないだろうか。また授業内容が刺激的だろうがそのあとに授業について話さない子は誰かとそれについて話さないだろう。別にROM専でもいい。他人の意見を聞くことに意義があると私は考える。流石にグループ全員がROM専だと困るが。…

【あべのコメント：「ROM専」ってチャット用語で、Read Only Memberという意味ですが、まだ通じるんです？】

グループワークをこれまでに何回か大学で行ったが、効果を感じたグループワークには共通点があった。それはこれからの会話を上手くまとめる役割の人の有無だった。この役割の人がいることで受動的で何もしないと言う人はいなかった。上手くまとめる役 いわゆる司会者の人がいることで会話をすぐに理解するのが苦手な人はそこで理解することができ、自分から話すのが苦手な人は自分の話す時間というものを設けることで上手く全員の人が参加した形でグループワークを可能にした。その役割の人がいなかった場合は、特定の人が永遠と議論を進めて他の人もその人たちに任せるというグループとしての意味を持たない活動が多かった。

グループワークにおいて効果的に進めるためにはその役割の人を事前に決めるか上手く見極めてグループを決めることが重要だと感じた。

今就職の際にコミュニケーション能力が求められますが、正直コミュニケーション能力が何だかわからないでいました。私は小中学生を対象とした学習塾でアルバイトをしています。上司にはコミュニケーション能力が身につくからアルバイトを続けたほうが良いと言われたことがあります。確かに小中学生と話す機会が多く、引っ込み思案の子と仲良くなったりできるようになりました。しかし、高齢者の方や障害者とコミュニケーションをとる場合には話が違ふと思います。私はコミュニケーション能力と聞くとどうしても話術と考えてしまっていますが、ジェスチャーなどを含めた自分の意志を伝える力、また相手の意志をくみ取る力だと思います。言葉が不自由な人と言語が異なる人とのコミュニケーションが不自由にもかかわらずコミュニケーション力があるとは一概に言えないと思います。

…「コミュニケーション能力」について私が思ったことは、必ずしも誰もが取り組み促進すべき能力でもないということだ。もちろん、生きていく上で最低限コミュニケーションを取ることは必要なことだとは思いますが、就いている仕事などによってその必要性の度合いも変わってくる。例えば、技術者などはいくらトークが上手であっても、技術が十分でなければ会社として必要な人材にはならない。作家なども、自分の考えや主張などを文字に起こして表現しようとする人などは周囲とのコミュニケーションはそれほど重要ではない。このように、誰もがそれぞれの生活の中以上に、コミュニケーション能力を促進する必要があるわけではないため、教育の中でそれを重視させるのは良くないと思った。

八方美人という性格は人に都合のいいように態度を変える人のことを指し、あまり良い意味で使われないことが多いと思いますが、コミュニケーション能力は『他者や場所との関係によって変わってくる』という点から、臨機応変に極力相手も自分も傷つけない態度をとれる、という見方もできるので、素晴らしい能力なのではないかと思いました。…

…コミュニケーション障害という言葉があることに疑問を持ちました。コミュニケーションを取ることができないという場面はありえることなのでしょう。十分にコミュニケーションを取ることのできるこちがコミュニケーション障害ではないというのなら、「十分」とはどの程度なのか、滞りなく会話できるくらいでしょうか。「十分」というのは人によって違うと思います。そして、「コミュニケーション障害」とは健常者が障害者のことを下に見ているから生まれた言葉なのかなと思いました。

【あべのコメント：コミュニケーションをだれが評価するのか。だれなら評価できるのかという問題ですね。】

…「コミュ障」と「陰キャ」という言葉について、私の経験ではそれはその人たち自身が使うことが多いと思いました。これらの言葉は人によって解釈が異なると思いますが、私は前者は自分を守るため、後者は自分を差別化するために使っているのではないかと考えました。自分はコミュ障だと言えば上手く話ができなくても相手が理解してくれているから安心できるからです。一方で、自分は陰キャだと面と向かって言うことは少なく、陰キャ同士で使い、逆に陽キャの人は使わないと思います。コミュニケーションを取りたいと思っているが苦手な人と、コミュニケーションを取る人を分けている人とで異なっていると思います。人によって話せる、話せないはあるとは思いますが、多様性の面からも自分を閉ざしすぎず人と関わることは大事なのではないかと考えます。…

…グループワークは、私はあまり好きではありませんでした。何か話さなきゃいけないというプレッシャーがあるし、気疲れすることが多いからです。遠隔のグループワークは楽しいです。正直授業の内容について話すことより、その後の雑談が楽しいです(笑)。時間的にも雑談の方が長いです。会えていない分話すこともたまっているし、課題のこととか不安もあるので、大変なこともあるけどグループワークがあって助かっている面もあります。また、大学のグループワークでは、自分にはない考え方を知れて、有意義だと感じるものもあります。

…陰キャ、陽キャという言葉は中学生ごろから使われ始めた言葉だと思う。おとなしい子やあまり活動的でない子は陰キャ、たくさん話す子や活動的な子は陽キャに暗黙のルールで分類され、陽キャは陽キャ同士、陰キャは陰キャ同士で友達を作ることが多かった。また、分類基準のうち見た目も含まれ、見た目がいい子は陽キャ、見た目が劣っている子は陰キャとされ、どちらかというとな陽キャは人気者が多かった。偏見かもしれないが階層的には男子も女子も陽キャが上だという暗黙のルールがあった。この価値基準はどこからどう始まったのか明確にはわからないが、不平等だと感じた。私は人見知りなため、中学校に入ってすぐは緊張と恥ずかしさで全然喋れず、そのまま陰キャというレッテルを貼られて一年間を過ごすことになってしまった。見た目や性格にとらわれることなくどんな子とでも平等に接し仲良くなれる世界だったらかなり学校生活が変わっていたらと思う。…

私の弟は発達障害があります。そのため、年齢に比べて知能に少し遅れがあるため、たまに変な言葉遣いになったり、言葉がスムーズに出てこないことがあります。年に1、2回ほど弟と社会福祉士の方が話す機会があり、そこに私も同席させてもらったことがあります。その際に、弟の返答に時間がかかったとしても、必ず待っていてくださるし、弟が考えてる途中で「こういうこと？」と口を挟んだりも絶対にしませんでした。それは、その方が社会福祉士ということが前提にあると、当然のことなのかもしれませんが、そういった姿勢は一般の人にも、色々な場所で求められているものではないかと思います。私は、自分のバイト先のコミュニケーションに関する環境はとてもいいと思っています。私は基本レジにすることが多いのですが、他の方たちが商品を出しに行ったりする時にいつも、「いつでもインカムで呼んでね！」と言ってくださいます。私はまだバイトを初めて日が浅い方なので、分からないことも多くあります。レジが混んだ時はもちろん、自分ではどう対応すればいいか分からない際に、先の一言を言ってくださるだけで、「頼ってもいいんだ」と思うことができます。コミュニケーションは片側だけの問題で決まるものではないと改めて思いました。

…よっぽど興味があり刺激的な内容でない限り帰りに友達と意見交換をすることはなく、友達は同じような価値観を持っているのであまり盛り上がりません。その反面グループワークだと嫌でも自分の意見を発表し価値観の違う人の意見を聞かなくてはならない状況が作り出されるため、自分の意見をまとめる訓練や異なる意見を受け入れる訓練となる。ただ、あまり仲の良くない人と行うグループワークは決して面白くはないので、グループワークという言葉は私の中ではマイナスのイメージだ。良い効果があってもいいイメージを持たせることが出来ていないので半分成功、半分失敗である。遠隔授業でのグループワーク、ペアワーク：→直接行うより皆消極的。カメラもオンにしたがらないので顔が見えず話づらいし盛り上がりません。ただ、現在は慣れてきたので遠隔授業が始まった5月ごろより話が進むようになった。…

私が履修している中で遠隔でグループワークをする授業は2つほどしかありませんが、非常にやりづらいつ感じています。私が一番はじめにzoomでグループワークをした時は顔も名前も知らない3人とのグループでした。全員がマイクオフ、カメラオフを続け、重苦しい雰囲気でした。自分が最初に声を上げていいのか、返事が返ってくるのか、発言が重なってしまわないかなど考えてしまい、結局先生が入ってくるまで誰も何も発しませんでした。先生の目が行き届かないというのも難点の一つだと思います。また、同じグループでプレゼンの準備をし発表をする機会があったのですが、その時には授業時間内にzoomで話し合う時間が設けられず、自分たちでteamsのチャットを使って話し合いの時間を設け、準備していくというものでした。teamsのチャットの通知に全く気づかないメンバーがいたり、本番中に電波が悪くて途切れ途切れになってしまったりなど、遠隔授業ならではのストレスがありました。人は表情や声以外にも多くのメッセージを受け取っており、小さな体の動きも大きな意味を持っていると思います。遠隔授業ではそれが伝わりにくく、顔を見せることで多少はスムーズになりますが、なかなか対面授業と同じようにはいきません。遠隔授業のグループワークは対面授業のそれ以上に配慮や考慮が必要だと感じています。

…遠隔授業において、グループワークは今のところ語学の授業でしか行われていません。英語の授業ではTeamsを使い、先生が作ったグループ別チャンネルで通話をします。スペイン語はzoomなので、先生が作ったグループに分かれる機能があります。決められた時間だけ同じグループの人しか画面に映らなくなり、違うグループの人の声は聞こえなくなります。時間が経つとすぐに戻ります。他人に声をかけるのが苦手なので、こうした仕組みはありがたいです。ただ、zoomは時間が経つと強制的に全員の場に戻されるので、先生が様子を見て時間を決めることができないという点では不便だと思います。…

…私は一年生かつすべての授業がオンラインなので、同じクラスの人に直接会ったことが一度もありません。また、授業で顔出しを強制されない場合、皆が音声のみでグループワークに参加します。そのため、グループワークでは相手の顔が全く分からない状態で自分の意見を言ったり相槌を打ったりしなければならず、とても不自由に感じています。…

…遠隔授業のグループワークは、最大で4人で行ったことがあります。先生や他の人たちに見られていない、聞かれていないという楽な状況で行えるので、気持ち的には楽に行えています。…

-----

…Zoomの授業では、先生がランダムに選んだ組み合わせで学生をブレイクアウトルームに入れて、話し合いをします。基本的にはそこに先生は入ってきません。だから分からないことがあるとわざわざチャットで先生を呼ばなければなりません。ネイティブの先生で指示が分からないと、よくそうなります。先生に対しても学生同士でも対面授業に比べると気軽に話しくいです。…

-----

遠隔授業でのグループディスカッションはコミュニケーションが苦手だと感じている私にとってとても苦しいものだと感じている。その上、一年生である私にとって完全なる初対面が画面越しだったので初めのほうの授業は授業が始まる前に人前で話をするときと同じくらい心臓がバクバクして本当に苦痛でしかなかった。

また、資料に「コミュニケーション能力」というものは「他者や場所との関係によって変わってくる」ものとあったが遠隔授業でとても感じる場所は大きい。グループの人達があまり喋らない人達だと自分が積極的に喋らなきゃ！という意識になって頑張って話そうとするが、誰か話してくれる人がいるとその人に大部分を投げってしまうようになってしまい、参加するグループによって態度は変わってしまっているなと感じる。…

-----

…私は毎回英語の遠隔授業でグループワークがあります。私は人見知りで初対面の人には積極的に話すことができません。しかし、何も話さない時の沈黙が辛く、直接会っていない、落ち着いた環境＝自室で受けているというリラックス状態からなのか、直接会うよりは積極的に自分から話しかけることができていると感じています。このことから、コミュニケーションがうまくできるかできないかの要因の1つに自分のいる環境が含まれることは正しいことだと思いました。資料の問いかけのSNS等のトラブルについて、曖昧な表現がトラブルを生むケースが多いなと感じました。例えば、「〇〇でいい？」という質問に対して「いいよ。」と答えても、OKの「良い」なのか、「(これじゃなくて)いいよ。」なのか、はっきりしません。直接話していれば表情や声の調子でわかりますが、文字だけのSNSだと誤解が生じてもおかしくありません。また、面と向かっての会話でも曖昧表現によるトラブルは起こります。先日『MIU404』というドラマで外国の人が日本人が使う「大丈夫」という言葉が難しい・わかりづらいと言っているシーンがありました。日本人同士ならば、なんとなく雰囲気で見ることができるとは思いますが、確かにわかりづらい表現だと思います。人見知りな私は、コミュニケーション能力＝積極的に話しかける、という印象がありましたが、このことから、人に自分の意見を正確に伝えることもコミュニケーション能力の1つであると考えました。人前で話すことが苦手ですが、これを心がけるだけでも自分のコミュニケーション能力は数段上がるのではないかと思います。

-----

私は、自分が初対面の人と躊躇せず会話を続けたり自分の思いを伝えられると思うので、コミュニケーションが苦手だとは思わないが、私の友達は口癖のように「会話ができない、話が續かない、緊張する」と言う。このように相手とコミュニケーションが苦手だと言う人は多くいる。人見知りだから人と話すのが恥ずかしく、話が續かないと思っているらしい。そのような子は大体自分のことを「コミュ障（コミュニケーション障害）」というが、私もこの言葉に違和感がある。確かにコミュニケーションをうまくとれないとき、相手との間に距離や隔たりを感じてなにか障害がそこに存在しているようには感じるかもしれないが、それは授業資料にあったように他者や場所との関係によって変わるもので、その場や相手との関係というものの上に障害物が存在する、という認識が正しいと思う。私が思うのは決して「自分」に対して障害の文字を使うことはないということだ。自分に問題があると感じ、自分の“能力”が低いからその言葉を自分に使うのかもしれないが、問題はその人の中には存在していない。実際その友達も私とはずっとお喋りをしているし、相手側からも話題が出る。他の人も、自分と趣味が合う人や、両親、バイト先やオンラインゲーム内ではハキハキ話せるなど、その人や関係、場所によって喋れたりするものだ。「コミュ障」でない、取って代わる別の言葉が浸透するのを望むと同時に、コミュニケーションという目で見たり評価できないものの善し悪しに対して何か名付けることすら必要ないのではとも思う。

高校時代、主に英語の授業でグループワークがあったが、会話に参加したからといって消極的な子は発言せず、周りの子の意見をただ聞くだけの子がいた。グループワークが終わった後にその子に個別で話にくくと、さっき出なかった意見や案を言ってくれた。さっき言ってくれれば良かったのにと、そんなキャラじゃないと引いてしまう。確かにペアワークは自分が考えないような意見を取り入れることができるが、その場が窮屈に感じている子は一定数いる。結果その子はあまり参加せず、その子の話も聞けないため成功しているとは言えないと思う。もし意見交換の場を設けたいならば、匿名で紙に意見を書き先生に提出し、読んでもらう手段をとってはどうか。紙相手なら自分の意見をしっかりと発することができると思うのだ。

-----

外国語を学ぶ授業の際にはオンライン上ですがZoomのブレイクアウトルームなどを用いたペアワークが行われる率が高い気がします。この場合、話す内容云々よりも、外国語で話す機会を増やそうという趣旨のものであるので強制的にグループワークをやらせる意味は割とあるのではないかと思います。帰り道などでも自発的に外国語で会話をすればいいといわれればそれまでですが、それは少々難しいところがあります。また、コロナのせいでクラスメイトたちと満足に会話ができている中、ペアワークの時間は互いのことを知れるチャンスでもあり、交流の場としては非常にありがたいです。とはいえ顔出しの授業でない場合は声色などからしかこちらの感情が伝わらないので、できる限り明るい口調を心がけるようにしています。授業内容が面白ければ帰り道などで勝手に意見交換が始まるのではないかと問いかけてありますが、わたしの場合は一緒に帰る友人は毎回ほぼ一緒なので、グループワークは普段あまり関わりが無いような学生とも意見交換ができる機会として重宝しています。逆に、あまり親しくない間柄の学生と組まされて会話が弾まないなどということも起きるのが難点ではありますが。

-----

私には中学生の妹がいます。ある授業では先生がグループワークを始める前に生徒に向かって「グループワークが終わった後、必ずグループで意見をまとめて発表してもらいます」というそうです。私はこのことについて疑問に思いました。様々な考え方を交流した後になぜ一つの答えを出す必要があるのか理解できなかったからです。私の経験上、このような場面で採用されるのは多数派の意見です。少数派の意見が発表されることはありません。この時、発表されなかった意見を発言した私はいいい気分ではありませんでした。なんだか自分の意見が間違っているような、そんな気分になったからです。一回そのような気持ちを感じてしまうと次から発言するのが怖くなりました。グループワークを否定するわけではありませんが、使い方によっては本来自由に意見を交換できるはずの時間が、全く意味のないものになってしまうことがあることを先生にも知ってもらいたいです。わざわざグループワークの時間を設けるのではなく、生徒が自由に発言できる空間をどのように作るかを考えた方が効果的だと私は思います。実際に私が通っていた中学校では一時期、発言する際に挙手をするのをやめました。不思議なことに授業での意見交流が活発になりました。全員が席が近い子と自由に話しながら意見を交換するようになったからです。強制ではなく、自然に起こる話し合いを大切にすべきだと思います。

-----

Communicative Englishという授業で、英語の本を読むという課題があります。私は、コミュニケーションの授業の課題で本を読むということ自体、おかしなことだと思っていました。しかし、その授業の先生は、「コミュニケーションとは、特定の文脈における非言語的な目的に対する意味の解釈、表現、交渉」であり、「読書はコミュニケーション」と考えています。文法をいちいち理解するのではなく、英語としてそのまま文脈を理解するための手段として、読書が適しているというのはわかります。しかし、読書自体がコミュニケーションであるということは、私には理解できませんでした。私のなかでは、読書は知識のインプットや物語の鑑賞といった、一方通行の行為だというイメージがあります。一方コミュニケーションは、「言葉のキャッチボール」という言葉に表されるような、他者との情報の共有・伝達、つまり双方向のやりとりをとともう行為だというイメージがあります。身振り手振りやアイコンタクトなども身体的な言語としてコミュニケーションに当てはまると思います。ほかに、ユニパなどにアップされた講義動画や資料を各自で見る→期日までに課題を提出する、という流れの授業は、読書に似た感覚を持ちます。それに対して、リアルタイムで会話をする授業や、提出した課題に対する先生からのフィードバックが返ってくる授業は、コミュニケーションが成り立っている授業だという感覚をもちます。つまり、私がコミュニケーションで大切だと考えていることは、「反応」ということです。その点で私は、読書というのはコミュニケーションのうちのひとつだとは言い難いと思っています。コミュニケーションをより広義に解釈する考え方が必要なのでしょうか。

【あべのコメント：一方向性のコミュニケーション、双方向性のコミュニケーションという区分があるように、コミュニケーションは双方向とはかぎらないものです。マスコミュニケーションがその典型。そして、最近はSNSの活用でマスメディアも双方向性がすこしだけ担保されつつある。とはいえ、「コミュニケーション」というときのニュアンスは、会話など、キャッチボール的なものが想定されているといえます。】

-----

…私は英米学科に所属しており、英語でディスカッションをすることが多いため、zoomを使った授業が多いです。zoomでは、ホストである先生が、二人組のペアや、何人組かのグループに分けることができます。そこで不自由なくペアワーク・グループワークを行うことはできますが、先生は何個かあるうちの一つのグループにしか見に行くことができないので、先生がいないことの方が多いです。実際のクラスルームでは、先生の目があるから喋らないと！といった緊張感がありますが、zoomでは基本的に先生はいないからと、少し怠けてしまう部分があります。これは自分としても反省すべき点でありますので、残りの授業も怠けず、全力で取り組みたいと思います。

-----



…Zoomには先生側の操作で学生たちをグループやペアに分けることができる“ブレイクアウトルーム”という機能があり、私もそれを利用する授業をいくつか受けているのですが、まだ2回目くらいの授業で、ライブ授業でしか顔を合わせず全員がほぼ初対面と言っていいような状態だったにもかかわらずグループやペアで活動してくださいと突然言われた時は、驚きましたし上手くできるか非常に不安になりました。その上、遠隔だと本当にそのグループやペアの人しか画面上にいなくなってしまい他のグループ・ペアや先生の様子を見ることができないので余計に不安になったり、活動が終わってすることがなくなってから沈黙の時間が続いたりするのが個人的に一番辛いです。もちろん共通の話題で盛り上がることもあります、気まずい状態が続くことも多く、正直こんなところで苦労するとは思っていませんでした。このようなグループワーク・ペアワークにかかわらず、初対面の人や大勢の前で話すときにも「自分はコミュ力（＝コミュニケーション能力）がないんだ…」とってしまうことが今までよくありましたが、今回の講義を通してその気持ちが少し楽になったような気がします。無理にコミュニケーションを取ろうとしなくても、自分のペースで進めればいいのかと感ぜられました。

-----

…顔の見えない授業でグループワークになったとき、誰も発言しないまま作業が終了してしまうことがありました。顔が見えないと相手が何を思っているのか分かりづらく、読み取れる情報が声しかないため、グループワークは大変です。また、一年生で友達もいないため毎回緊張しながら話すのも疲れます。

【あべのコメント：顔が見えていると、しゃべりたそうにしている人の表情が見えるので、話をふることができますね。カメラオフの状態だと、それができない。】

-----

今から言うことを書いてくださいと言われて私が書いたのは「四角の上に丸を2つ書いてください。」という文章でした。私の中では図形を描くという風には変換されず、文章を書くということだと思ってしまいました。言葉で伝えるだけでは解釈の違いが起こるとということが実感された実験だったと思いました。…

【あべのコメント：3限の配信では「絵をかいてください」と発言し、4限の配信ではいいませんでした。伝達のしかたでも、つたわりかたは変化しますね。なお、このゲームのようなものは『精神』というドキュメンタリー映画にでてきたものです。精神科医の人が看護師を対象にした研修でやっていました。】

-----

「四角の上に丸二つ書いてください」と言われ、私は、四角と丸がくっついている絵を描きました。これはまさに先生の解釈と違ったということです。これ以外にも、話題が変わっているにもかかわらず、それに気づかず、話が噛み合わなくなるという経験は、よくあると思います。アンジャッシュのすれ違い漫才はまさに、コミュニケーションのずれを物語っています。実際に私は、話を聞いて理解する能力が足りない部分があります。何かを頼まれたときに前回やったことでも今回は言われなかったためやらずにいたら、これもやってと言われたり、発音、言葉が似ていることを違う方で解釈してしまったりすることがよくあります。私はこのように、コミュニケーションのずれをたくさん経験してきたので、自分は相手とコミュニケーションを取る時、ズレがないかを確認をしています。二人（複数人）の人と取るコミュニケーションと言う「伝える」という行為は、双方の理解度、話し方などの相手を想う行為によって、より上手くなっていくものなのだと思います。私はこれを「能力」と言う言葉で表すのは違和感を感じてしまいます。

-----

…私の祖母は認知症で、うまくしゃべれず寝たきりの状態です。今回の授業資料に、知的障がい者や認知症の高齢者も自分の意志を伝達しているという内容がありました。実際に私の祖母も、ほとんど言葉はしゃべれなくなってしまった今でもしっかりと意思表示していると思います。祖父が食事を食べさせているのですが、食べたくなくなると目をつむったり、口を開けなくなります。他にも、嫌なことがあったらいやそうな顔をするし、面白いと思うことがあればニコニコします。うまく話せなくても意思表示しているので、祖母のことをできるだけ理解しようとするのが私にできることだと思いました。

-----

大学図書館のラーニング・コモンズについて、秋田県の国際教養大学の図書館がかなり先進的だと感じました。まず、24時間・365日開いているという点が非常に驚きでした。この制度により、学生や教職員はいつでも空いた時間で図書館を利用できるので、とてもうらやましいです。また、X(クロス)ラウンジという場所は飲食自由で、声の大きさを気にする必要がないと公言されています。

参考：国際教養大学(<https://web.aiu.ac.jp/library/outline/>)

中嶋記念図書館([https://library.aiu.ac.jp/?page\\_id=476](https://library.aiu.ac.jp/?page_id=476)) …

-----

Youtubeライブや授業プリントで紹介されていたラーニング・ commonsは設置している大学が国立(名古屋大学・新潟大学)と私立(同志社大学)で、公立大学が紹介されていなかったのも、公立大学で読書スペースとは分けてラーニング・ commonsを設置している大学はないのかとインターネットで「〇〇県立大学 図書館」と調べました。その結果、読書スペースとは別の離れた場所に設置している大学をいくつか見つけることができました。例えば、静岡県立大学の草薙図書館は、3回に「LCフロア」というものを設けており、そこにはホワイトボードや移動可能な椅子などの設備があります。かなり広いスペースが割かれており、設備も充実しているため、かなり使い勝手がよさそうだと思います。

また、岩手県立大学の図書館はテラススペースがあり、図書館の隣には多目的スペースがあります。テラススペースにはテーブルやイス、パラソルなどが設置されています。外であることからプロジェクターを用いた発表などはできないと思いますが、簡単なディスカッションであればできるのではないかと思います。また、現在は利用を制限されていますが、図書館は利用できるという事なので、風通しもよく3密にはならないのではないかと思います。多目的スペースはラーニング・ commonsの機能をもつ施設で、グループワークやPCの使用ができます。朝は7時30分から開いており、図書館の閉館時間後も利用できる場合があるので、「図書館が開いていないから使えない」という問題を解決していると思います。

<参考サイト> 静岡県立大学草薙図書館フロア案内

<https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/library/facility-information/kusanagi-directory/>

岩手県立大学 4Fテラスについて

<https://www.iwate-pu.ac.jp/information/mediacenter/terrace.html>

岩手県立大学 多目的スペース風のモント

<https://www.iwate-pu.ac.jp/information/mediacenter/kazenomont.html>

ラーニング・ commonsという言葉は初めて聞きましたが、資料を読んで地域にある図書館でも行われていることを思い出しました。私の家の近所には鶴舞図書館があります。鶴舞図書館には、地下1階に誰でも利用可能な自習部屋が2つあり、合わせて100席は超えると記憶しています。私も高校生の頃よく利用していました。しかしそこは私語禁止であるためとても静かで、学生で溢れており、入ると何だか重々しい雰囲気を感じます。入るまでに何となく勇気がいるので、その瞬間が苦手でした。しかし数年前に、1階の一部スペースで「ともに学ぶ広場」っぽい名前だったと思います(記憶が曖昧な上、検索しても出てきませんでした) 会話してもいい空間でありながら2人以上で利用できる勉強スペースが設けられました。こちらは本当に図書館の図書スペースの一部に作られたものですので、程よい物音と人の声があり、それが心地よかったです。さらに友達と教え合いながら、少し休憩に会話を交えながら出来るので、よく利用していました。机は4つしかなく(机ごとにパーテーションで区切られているのでプライバシーも守られて一目が気になることはありません)、最大2時間までと時間に制限はありましたが、あれは良い設備だなと今も思います。(鶴舞図書館のホームページのURLを貼ろうかと思いましたが、このラーニング・ commonsについて書かれているもの見当たりませんでした。) …

【あべのコメント：「鶴舞図書館 グループ学習」で検索するとヒットしました。「トモニマナブ広場 ご利用のしおり」。

[https://www.library.city.nagoya.jp/img/kensaku/teens/teens\\_corner/hoshi1\\_01.pdf](https://www.library.city.nagoya.jp/img/kensaku/teens/teens_corner/hoshi1_01.pdf)

「名古屋市図書館 各区図書館のティーンズコーナー」 [https://www.library.city.nagoya.jp/kensaku/teens/teens\\_corner.html](https://www.library.city.nagoya.jp/kensaku/teens/teens_corner.html)】

…自粛期間でSNSに対して自分が思ったことがある。私はインスタグラムを使っているのだが、インスタにはストーリーという機能があって、リアルタイムで友達が今何をしているかを見ることができる。何も予定のない暇な日にストーリーを見ていると、何となく「自分は今暇なのにみんな楽しそうだな」とか「みんな充実してるな」とか考えて心がざらつく。その時、「ああ私ってSNSに縛られてるな」と思った。SNS中心の生活になっていて、逆にSNSに遊ばれている気すらした。だから今私はインスタをほとんど見ないが、「キラキラした生活」をみんなに見せようとSNSのために写真を撮り、SNSのために何時間も費やすのはもったいないことであって、本来のコミュニケーションツールとしての役割をすでに失っている気がする。

…私は愛知県立大学のラーニング・ commons(のような)スペース好きです。狭くて声はあまり出せないし席が足りなかったりするの残念ですが、辞書類が置かれている本棚に近いのでさっと取りに行けてみんなで共有できるのは良いと思います。家で一人レポートを書いていると自分の頭の中だけで堂々巡りしてしまうので、それを吐き出すために友人と喋りながら整理する場が必要だと感じました。せめて防音の壁のようなものが設置されると改善されるのではないかと思います。…

県大の図書館の共同スペースは割とすぐ司書さんに怒られてしまうので、かなりびくびくしながら作業することになりがち。コミュ障という消極的な人をいうことが多いように思うが、私がよく遭遇する会話の成り立たない人は、自分ばかり話してしまう人が多い気がする。私自身消極的な方で自分から話題を提供するのが得意ではないので会話を始めてくれるのは助かるが、私も話題を提供されればそれに対してそれなりに自分の体験を話したり、意見を出したりすることはできるし、お互いの意見を共有し合っただけの会話だと思うのだが、こちらが話の切れ目かな？と思って話し出そうとしても聞いてくれず、どんどん自分の話を続けていく人が今までの経験でも結構いて、よくもやもやしている。会話のキャッチボールが双方向じゃなくて、向こうからどんどん投げられるのを受けられない感じ。積極的になることだけがコミュニケーションのすべてではないと身をもって感じる。…

SNS上でのコミュニケーションは対面よりも気楽にできる点が長所だと思います。話したことの無い人にいきなり話しかけるのはなかなか勇気がいります。例えば私の場合は、自分から話しかけておきながら、緊張して相手からの返答に上手く返してあげられなかったら嫌だな... などとってしまいます。でもSNSのチャット上であれば、落ち着いてきちんと考えた上で返事ができるし、一歩踏み出す勇気が出やすいと感じます。その一方で、関わりたくない相手と距離を置きづらいという短所があると感ずることがあります。面識はあるが深い関わりを持ちたくないと感じる相手から友達申請が来たとき、友達申請を却下する事は可能だけれど、今後の人間関係を踏まえたりするとそうはできないという場合が多いです。送られてきたメッセージに返信する際も同じような感覚で、既読スルーをするわけにはいかないしな... と思いながら会話を続けてしまいます。対面でのコミュニケーションであればタイミングを見計らって会話を終わらせられたり、時がたてば会う機会もなくなっていくことが多いけれど、そういったSNS上の会話には逃げ場がなくしてしんどく感ずることがあります。そうはいつても友達申請を受け入れ返信をしている時点で、私の方も話したいという気があると捉えられるのは普通のことだろうとも思っています。相手にもきっと悪気がないのだろうなと感じると、すごく自分勝手な感情だなと思ったりもします。SNS上では感情が伝わりづらい分、意識的に思いを伝えようとすることや相手の気持ちを想像することを大切にしないといけないなと思います。いつでも比較的気軽に一对一の会話の場を設けられることは便利でもあるけれど、場合によっては相手にとって負担になってしまうこともあるのは難しい問題だなと思いました。

…周りが携帯を持ち始める中学生くらいの時、LINEに関する問題はよく耳にしました。情報共有に便利なようにどのクラスや部活もグループチャットというものを作ります。ここで問題が発生するのです。それは自分だけ招待されない、悪口を言われた、といったものです。また、メッセージを読んだのかわかる「既読」機能といったLINEの特徴でもある便利な機能に関しても「既読無視」や「未読無視」といった問題が発生していました。一時期流行語にまでなるほど、若者の間で既読無視は問題視されていました。みな都合というものがあります。それなのにも関わらず、若者は相手に対して早急な返事を要求し、自分の都合のみで遅いだの未読無視だの騒ぎ立てるのです。また、これはLINEのみでなくメールにおいても起こりうることなのですが、送り手と受け取り手の解釈に齟齬が生じることもしばしばあります。気軽にコミュニケーションをとることのできるものですが、一方ですれ違いが起こり関係性にヒビを作ってしまうかもしれない恐ろしいツールでもあります。LINEひとつあればメールに電話番号まで聞く手間が省けます。利便性ははるかに高いのですが、私はお互いの表情がわかる対面でのコミュニケーションの方がすれ違いも起こらず、良いと考えます。

【あべのコメント：ひとつ上のコメントにあるように、まさに「SNS上の会話には逃げ場がな」いわけですね。それはしんどい。時間をかけて長文をやりとりするようなことがあってもいいのに。】

…最近、短い動画をあげることのできるTikTokというアプリで産婦人科医の高橋怜奈さんのアカウント (@renatksh) を見つけた。このアカウントでは、コメント欄に来た妊娠などに関する質問に高橋怜奈さんが答えている。私たちは、自分のアカウントさえ持っていれば質問できるし、自分について名前や顔などの情報をさらす必要はない。これはとてもいいSNSの使い方なのではないかと思う。妊娠や女性の生理についての疑問や不安など、人には相談しづらかったり、病院の先生にも恥ずかしくて聞きづらかったりすることが気軽に質問できる。ウェブ上にも質問箱はあると思うが、やはり文字で答えてもらうより実際に人が説明してくれる方が安心でき、わかりやすいと感じる人もいるだろう。こういった場があることは、多くの人にとって助けとなると考える。

…以前地元でコンビニのATMを使った時、「ようきたな〜」「またきてな〜」という音声 flowed のだ。最初の「ようきたな〜」にはびっくりしたけど、最後「またきてな〜」と言われて、「またくるな〜」と小さく手を振りながら小さな声で返事をした。機械相手に何しているんだろうと思われそうだけど、方言を話すというだけで、機械に愛着を感じてしまったのだ。調べてみるとファミリーマートで方言を話すATMが導入されているようで、とても面白い取り組みだと思った。

日本経済新聞「ファミマ、三重の方言でATM案内」

[https://www.nikkei.com/article/DGXLASFD02H23\\_S6A201C1L91000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASFD02H23_S6A201C1L91000/) (2020.8.1)

YouTube「ATMに三重のご当地言葉 ファミマ、地域密着PR」KyodoNews

<https://www.youtube.com/watch?v=o-usBIHGuXY>

-----

【第7回のコメント】私は高校一年生の時からある病気を患っています。その症状として上半身に神経痛が出るのですが、一時期はペンを握ることが困難になるほどに手や腕の痛みが強くなりました。字が書けないことで高校の課題を提出することも難しくなり、先生に課題の免除をお願いしたのですが、受け入れて下さる人とそうでない人に分かれました。受け入れる人の中には、筆記の課題を免除する代わりに、会話形式で問題を出して私が勉強しているかどうかを確認する方法をとる人がいました。字が書けず課題を提出できなくても、ちゃんと勉強していることを証明できて嬉しかったし、字が書けなくても頑張っただけという気持ちを抱いた記憶があります。一方で、ある先生には「ゆっくりでいいから頑張っただけ」と言われ痛みに耐えながら課題に取り組んだことがあります。ゆっくり書いても痛いのは変わらないし、形が大きく崩れた字しか書けずに提出したので、その方法で痛みによる問題を解決できたとは思えなかったし、痛い思いをして崩れた字ばかりで埋めた課題を提出することが本当に意味のあることだったのか少し疑問に思いました。書くことが難しいから健全な人よりも時間をかけて書く、崩れた字でもいいから書くとかではなく、書くこと以外の方法で学習することを認めてもらえることは私にとってとてもありがたいものでした。また、私が受験生になった時にセンター試験の「受験上の配慮」の存在を知りました。そこには様々な障害や病気の人のための多様な配慮方法があります。私は「別室受験」と「チェック解答」の配慮を受けられることになったのですが、その配慮によって自分の体調に合わせたスタイルで受験することができ、模試以上の力を発揮することができました。高校までは、大勢で一斉に受講する授業が多く、特別支援学級に入る以外には特別な配慮を受けられる体制があまりなかったように感じます。センター試験や大学で受けられる配慮のようなものが、もっと中学校や高校でも普及するようになってほしいなと心から思います。

-----

## 学生への質問：

- ・これまで経験したテストのうち、よかったもの、ひどいと思ったものは、どのようなものでしたか。
- ・遠隔授業になり、テストではなくレポートとなった授業も多いようです。オンデマンドでのテストもあれば、ライブ型のテストも実施されるようです。今回、期末テストが遠隔で実施されることになり、どのような点がいいですか、よくないですか。
- ・漢字テストのように、言語に関するテストで、採点する側に問題があると感じたことがあれば教えてください。

期末テストの問題（事前公開問題の4問め）：「国を単位にして文化を語る」ことの限界／問題点について、具体例をあげて説明する。

配布プリントのままの解答ではダメ。自分なりに見つけるか、授業でとりあつかったことから発展させること。200字前後。本やウェブの記事などを参照した場合は、「『』によると、」などと出典を書くこと。自分なりの説明でも可。

## 期末テストについての補足

- ・目安として文字数を書いています、超過してはダメだという話ではありません。URLは文字数にふくめません。
- ・ワードで提出したいという学生の要望がありましたが、採点のとき大変なので、これまでどおりの提出方法とさせていただきます。ワードなどで作成してコピーペースとするといいでしょう。